

## 北海道大野農業高等学校

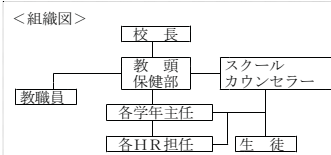
課程 全日制  
 学科 農業科  
 生徒数 368名

### 1 取組の特徴

- 1 エゴグラム・アセスなどの心理検査結果による、生徒の状況把握と学年別生徒理解会議の実施
- 2 アンテナショップ「鹿島屋」や異年齢交流等の教育活動を通じた、コミュニケーションスキルの向上
- 3 スクールカウンセラーと教員のコンサルテーションによる生徒の状況の把握

### 2 取組のねらい

中学校から適切な対人関係を築くことができなかったため、社会的行動の欠如、不登校、精神的不安定などの問題を持つ生徒が多く見受けられることから、生徒のコミュニケーション力や自己肯定感の向上を促す教育活動をめざす。



### 3 取組の経過

5月	第1回大野幼稚園との交流会、鹿島屋開店、第1回特別支援学校との交流会、学年別生徒理解会議	8月	鹿島屋開店
6月	鹿島屋開店、1学年エゴグラム性格検査、1学年コミュニケーションゲームの実施	9月	第3回大野幼稚園との交流会、第3回特別支援学校との交流会、学年別生徒理解会議
7月	第2回大野幼稚園との交流会、鹿島屋開店、第2回特別支援学校との交流会、学級適応検査「アセス」の実施、学年別生徒理解会議	10月	緑園祭販売実習、食彩フェア販売会
		11月	第4回大野幼稚園との交流会、鹿島屋開店
		12月	サンタクロース活動、鹿島屋開店

### 4 取組の内容

- 1 アンテナショップ「鹿島屋」販売会の事前指導及び実施(月2回)
  - (1) 日時：5/13・27, 6/10・24, 7/8・29, 8/26, 11/11・25, 12/16の14:00~15:00
  - (2) 対象：3学年
  - (3) ねらい：生産物販売を通して、ソーシャルコミュニケーション力を向上させる。
  - (4) 内容
    - ・一週間前までに生活流通班で各学科の販売物を確認する。
    - ・第2月曜日、第4月曜日に学校のWebページに販売物の広告を掲載する。
    - ・「鹿島屋」内の売り場等は生活流通班で準備する。
    - ・実際の販売は各学科に対応する。
  - (5) 成果と課題 (○が成果、●が課題)
    - 販売活動で地域住民とふれあうことを通じて、コミュニケーションを密にすることができ、生徒が喜びを感じることができた。
    - 販売回数の少なさ、販売時間の短さ、広告の方法などについて、さらなる工夫が必要である。



開店時の「鹿島屋」の様子

### 2 コミュニケーションゲームの実施

- (1) 日時：6月2日(宿泊研修) 15:00~17:00
- (2) 対象：1学年
- (3) ねらい：構成的グループエンカウンターを体験することにより、人間的なふれあいを深めるとともに、他者に対する責任感や信頼感を深める。
- (4) 内容：バースデイトーク、絵合わせゲーム他
- (5) 成果と課題 (○が成果、●が課題)
  - 生徒は楽しみながら体を動かし、クラス内のコミュニケーションを深めることができた。
  - 活動に対して抵抗感を持つ、一部の生徒への事前指導を充実させる必要がある。



コミュニケーションゲームの様子

### 3 エゴグラム性格検査の実施及び結果についての指導

- (1) 日時：6月2日(宿泊研修) 20:00~21:00
- (2) 対象：1学年
- (3) 検査結果の活用
  - 用意してあった資料で生徒に検査結果の見方を説明し、自分の性格を客観的に把握させた。自分の欠点を全て直すのではなく、「これだけは直していきたい」「これなら直せる」というものに取り組むようアドバイスをした。
- (4) 成果と課題 (○が成果、●が課題)
  - 集団の全体的な傾向が把握できた。

### 4 スクールカウンセラーの活用

- (1) 日時：毎月第2木曜日、第4木曜日(原則) 9:00~17:00
- (2) 内容：生徒対象の個別カウンセリング、生徒についての教員とのコンサルテーション、心理検査「エゴグラム性格検査」、学級適応検査「アセス」の検査結果についてのアドバイス、カウンセラー通信の発行(月1回)
- (3) 成果と課題 (○が成果、●が課題)
  - スクールカウンセラーに話することで、自己理解が深まったり、自分の課題に改めて気がついたりしたほか、自分の良さを再確認することができ、進路実現につながるなど、生徒自身の成長につながった。
  - 今まで教員にあまり話をしなかった生徒が、スクールカウンセラーとの面談をきっかけに、担任とコミュニケーションを取れるようになった。
  - スクールカウンセラーのより積極的な活用を図るため、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングなどの集団活動での活用を検討する必要がある。

### 5 次年度に向けて

- 1 成果
  - (1) 中途退学者数が昨年度と比較して約4割減少した。特に1学年での中途退学者数が4分の1に激減した。
  - (2) 農業高校の特色を生かした販売会や異年齢交流等の様々な活動の経験を重ねるごとに、生徒はコミュニケーションスキルや自己肯定感が向上していく実感を得ていた。
  - (3) スクールカウンセラーとの面談など、生徒が話をする機会を設けることにより、自分の進路に前向きに取り組むなど、目的を明確にした落ち着いた学校生活につながった。
  - (4) 今年度、2回実施した学級適応検査「アセス」の結果の分析を通して、生徒やクラスの状況を、学校全体で細かく把握することができた。
- 2 課題
  - 「アセス」の結果の分析により、適応感の各項目で上昇傾向が見られたクラスにおいて要支援生徒が大幅に減少していることから、クラスを基盤とした人間関係づくりの取組をより一層充実させる必要がある。また、2回目では学習的適応の要支援生徒が増加していることから、個々の生徒へのきめ細かな、継続的な学習指導の充実が必要である。
- 3 次年度に向けて
  - 「アセス」を有効に活用する方策を検討するとともに、その分析結果を踏まえ、生徒自身がやりがいを一層感じられるよう、交流活動等の内容の充実を図る。